

二者間会話に関する研究 —初対面時の発話のつりあいと印象の観点から—

小川一美

I. 問題と目的

「日常的な対人的相互作用過程において、会話が有効かつ重要な役割を担っていることは疑いのないところである。にもかかわらず社会心理学で会話そのものが研究対象とされることは少なかった」(浦・桑原・西田, 1986)。しかし、この指摘以降も、彼らによる一連の会話に関する研究はあるものの、会話に着目し対人相互作用過程を検討した本邦における研究は数少ない。また、大坊(1980)は、対人的なコミュニケーションを考えていく上で、二者間の相互作用は基本型であり、豊富な洞察の機会を与えると述べており、二者間会話を取り上げる必要性や有効性を指摘した。そこで、本研究では、対人相互作用における会話の影響に着目し、会話の特徴と会話によってもたらされる印象との関係について検討する。

「従来、対人交渉事態であっても観察対象は一方の個体に固定されており、相互作用過程自体を取り上げている報告が少ない」(大坊・杉山・吉村, 1975)という指摘にもあるように、一方の会話者の発話のみではなく二者の発話を取り上げることの有効性は高い。そして、Newcomb(1965)が指摘するように、コミュニケーションを行っている両者はともに自分自身が所持している情報を共有したいという動機を持っている。したがって、両者に関する情報をお互いが所持し合うことで二者関係は安定する。また、会話では、他者に悪い印象を与えないために投げかけられたものに対して同じ様なものを返すべきであるといった、暗黙の返報規範が働いていることが考えられる。そこで、本研究では二人の会話者の発話のつりあいという観点から会話の特徴を捉えていく。

また、先行研究の中には、会話者と観察者という立場の違いに着目した研究がある。つまり、話をしている会話者とそれを聞いている観察者では、もう一方の会話者に対して抱く対人認知や対人印象、そして会話に対する判断に違いが生じてくるという研究である。そこで、本研究で取り上げる発話のつりあいと対人印象との関係においても、その会話場面に会話者として参加する場合と観察者として参加する場合とでは相違点が生じると考えられるため、このような視点からも検討を加えていく。

II. 研究1

<目的>研究1では、初対面時の二者間会話の構造を発

話のつりあいという観点から検討する。そして、実際の発話量のつりあいや判断された発話量のつりあいと、観察者が抱く会話者や会話に対する印象との関係についても探索的に検討する。

<方法>被験者：女子大学生、女子大学院生45名。手続き：各会話につき5名の被験者に刺激となる会話ビデオを提示し、その後、質問紙に対する回答を求めた。会話中の会話者の表情やしぐさが被験者に与える影響を取り除くため、会話ビデオでは音声とどちらの会話者が話しているかを知らせるA、Bという文字のみが画面に提示された。会話：女子大学生の初対面ペアによる「友情」についての10分間の会話9種類。質問紙：「会話者に対する印象」「会話に対する印象」「判断された発話量の偏り」。言語活動性指標：「実際の発話量の差」会話者それぞれの10分間の発話を、発話カテゴリーに分類し、各カテゴリーに属する発話の出現頻度と出現時間を測定した。確認された発話カテゴリーは、「開示」「情報」「質問」「応答」「傾聴沈黙」であった。

<結果と考察>初対面時の会話の特徴を検討するため、「実際の発話量の差」の各変数間の相関を求めたところ、初対面時の10分間という短時間の会話においても、自分に関する情報をより多く話す話し手と、それを聞く聞き手といった二者の役割が生じていることが示唆された。次に、観察者はどれほど正確に二者の発話の偏りを判断しているのかを分析した結果、「質問」量の偏りに関してのみ正確な判断がなされていたことが示された。そして、会話者に対する印象については、「積極性因子」と「人当たりのよさ因子」の2因子構造であることが確認された。また、より多く開示を行っていたり全体を通して発言量が多いと判断した会話者を観察者は積極的であると感じ、反対に相づちが多かったと判断した会話者に対しては積極的でないという印象を抱いていた。統いて、会話に対する印象については、「快-不快」の1因子構造であることが確認された。実際に全体の発話量が一方の会話者に偏っている会話に対して観察者は不快感を抱くこと、また、観察者が両会話者に対して積極的であるという印象を抱いたときは、その会話に対しても快印象を抱くことが明らかとなった。

III. 研究2

<目的>研究1で刺激として使用した会話は比較的自然

二者間会話に関する研究

会話に近いものであった。したがって、本研究で着目している発話のつりあい以外の要因の効果を統制することができない。そこで、研究2では、会話内容や会話者ペアの違いによる影響などの要因を統制した上で会話刺激を作成し、発話のつりあいと会話者や会話に対する印象との関係をより明確にする。

＜方法＞被験者：女子大学生および女子大学院生105名。手続き：各会話につき21名ずつの被験者に会話を聞かせ、その後、質問紙に対する回答を求めた。被験者には「女子大学生の初対面ペアに友情について話してもらったときの会話です」というカバーストーリーのもとで音声のみを聞かせた。会話：会話における発話のつりあい以外の要因を統制するために、すべて同じペアによる10分間の会話を5種類作成した。研究1の結果から、「開示」「応答」量の二者間の偏りが会話に対する印象と関わりを持っていることが示されたため、研究2ではこの2カテゴリーに着目し発話量を操作し、「開示」「応答」以外の発話カテゴリーに属する発話量は5会話ほぼ同量になるよう統制した。質問紙：研究1と同様。

＜結果と考察＞5つの会話による従属変数への影響を検討するため、多変量分散分析および級内共分散による相關分析を実施したところ、以下のことが示された。「開示」量は二者間のつりあいがとれており、「応答」量が一方の会話者に偏っている会話では、観察者は相づちを多く打つ会話者に対して積極的ではあるが人当たりはよくないという印象を抱いていた。また、一方が「開示」量が多く、もう一方が「応答」量が多い会話では、「開示」量の多い会話者に対して積極的であるという印象を抱くことができた時に、「応答」量の多い会話者を人当たりがよいと感じることが明らかとなった。しかし、それだけでは会話に対して観察者は不快感を抱いており、「応答」量の多い会話者に対しても積極的であると感じることができた場合に、会話に対して快印象を抱くことが示された。以上のように、研究2では、「開示」「応答」という2要因の交互作用的な働きを探ることができた。

IV. 研究3

＜目的＞観察者と会話者の立場の違いが、会話者や会話に対して抱く印象に相違をもたらすことが予測できる。そこで、研究1、研究2で扱ったのは、観察者による印象であったが、研究3では会話者が抱く印象に着目する。そして、発話のつりあいと印象との関係について、観察者と会話者という立場の違いから検討を加える。

＜方法＞被験者：女子大学生及び女子大学院生40名。手続き：初対面かつ同学年である二人の被験者に実験室まで来てもらい、「友情や友達関係についてお二人で話してください」と教示した。会話中お互いの顔が見えない

ようついたてごしに10分間会話をしてもらい、その後、質問紙に対する回答を求めた。質問紙：「相手の会話者に対する印象」「会話に対する印象」「判断された発話量の偏り」。言語活動性指標：研究1と同様。

＜結果と考察＞会話者は会話後にどれほど正確に自分と相手の発話量の偏りを判断することができたのかについて検討したところ、正確に判断することができたのは、質問量、応答量、総発話量の偏りであった。「会話者に対する印象」に関しては、研究1、研究2とは異なる「好ましさ因子」という1因子構造が示された。この結果は、Monahan (1995) が指摘した会話者と観察者の認知的負担の違いという観点から、会話者は自らも会話に参加しているため認知的な負担が多く観察者よりも単純な因子構造が現れたと解釈することができる。また、会話者が判断する自分と相手の発話量の偏りと相手の会話者に対する印象の関係を検討した結果、会話者は自分が相手よりも多く開示をしていたと判断した場合は相手に好ましくないという印象を抱き、反対に相手の方がより多く開示をしていたと判断した場合には相手に対して好ましい印象を抱くことが示された。この結果は、自己開示の返報性に関する研究では、自己開示を行う主体が好ましいと感じる二者間の開示量の主観的なつりあいについて検討することの必要性を示唆するものであった。そして、「会話に対する印象」に関しては、観察者同様、会話者による印象評定においても「快印象因子」という1因子構造が確認された。また、会話者は、方向は問題ではないが開示量が一方に偏っている会話に対して不快な印象を抱くことが明らかとなった。

V. 総合的考察

本研究では、二者間の発話のつりあいに着目し、相互作用過程である会話とその後の印象の関係について検討することが目的であった。そして、観察者と会話者という立場の違いがもたらす影響についても検討を加えた。観察者と会話者に着目し比較検討した結果、会話者は会話に対する関与度も高いため、観察者よりも発話量の二者間の偏りを正確に判断することができること、会話者に対する印象では因子構造が異なること、観察者は全体的な発話量のつりあいがとれている会話に対して好印象を抱き、会話者は自分と相手の開示量のつりあいがとれている会話に対して好印象を抱くことなどが明らかとなった。今後は発話のつりあい以外の会話特徴にも着目し、それらが会話後の印象にいかなる影響を与えるかについて、観察者と会話者それぞれの観点から検討を重ねる必要がある。